

Title	法令
Author(s)	
Citation	經濟論叢 (1926), 23(1): 165-174
Issue Date	1926-07-01
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/128415">http://dx.doi.org/10.14989/128415</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號一第

卷三十二第

行發日一月七年五十正大

## 論叢

効用、價值及び價格

九州帝國大學  
教授 文學博士

高田 保馬

資本金子税と地方附加税

教授 法學博士

神戸 正雄

ツエツコ・共和国の土地制度改革

教授 法學博士

河田 嗣郎

一九二二年のロシア勞働法

教授 法學士

末川 博

我國財政の季節的變動

助教授 法學士

汐見 三郎

## 講演

我國の國際貸借と金解禁問題

法學士

井上準之助

## 說苑

誤れる植民政策の畸形兒・琉球

教授 法學博士

山本美越乃

足袋の製造工程

法學士

木多 芳郎

## 雜錄

貧富調節論

教授 經濟學博士

木庄榮治郎

天台宗團の財政

經濟學士

中川與之助

經濟學會大會記事

## 法令

清涼飲料税法・織物消費税法中改正・地方税に關する法律・健康保險特別會計法・農林倉庫法中改正・輸出生絲検査法・郵便年金法・製鐵業獎勵法

# 法令

## 清涼飲料税法

法律第十六號 (大正十五年三月二十七日)

第一條 本法ニ於テ清涼飲料ト稱スルハ炭酸瓦斯ヲ含有スル飲料ヲ謂フ但シ金重量ノ百分ノ五以下ノ炭酸瓦斯ヲ含有スルモノ及全容量ノ百分ノ一以上ノ純酒精ヲ含有スルモノハ此ノ限ニ在ラス

前項ニ於テ純酒精ト稱スルハ攝氏十五度ノ時ニ於テ〇・七九四七ノ比重ヲ有スル酒精ヲ謂フ

第二條 清涼飲料ニハ左ノ區分ニ依リ清涼飲料税ヲ課ス

第一種 玉ラムネ 壘詰ノモノ

一石ニ付

七圓

第二種 其ノ他ノ壘詰ノモノ

一石ニ付

十四圓

第三種 壘詰以外ノモノ

炭酸瓦斯使用量一庭ニ付

三圓

第三條 清涼飲料ヲ製造セムトスル者ハ製造場一箇所毎ニ政府ノ免許ヲ受クヘシ其ノ製造ヲ廢止セムトスルトキハ免許ノ取消ヲ求ムヘシ

天然ニ湧出スル清涼飲料ヲ容器ニ充填スルコトハ本法ノ適用ニ付テハ之ヲ第二種ノ清涼飲料ノ製造ト看做ス天然ニ湧出スル清涼飲料ヲ原料トシテ第三種ノ清涼飲料ヲ製造スルコト亦同シ

第四條 清涼飲料税ハ第一種及第二種ノ清涼飲料ニ付テハ製造場外ニ移出セラレタル石數ニ應ジ、第三種ノ清涼飲料ニ付テハ製造場外ニ移出セラレタル清涼飲料ニ使用セラレタル炭酸瓦斯ノ量ニ應ジ清涼飲料製造者ヨリ之ヲ徴收ス

第五條 清涼飲料ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ之ヲ製造場外ニ移出セラレタルモノト看做ス

一 製造場内ニ於テ飲用セラレタルトキ

二 製造場内ニ現存スルモノ公賣セラレタルトキ

三 製造免許取消ノ場合ニ於テ製造場内ニ現存スルトキ

第六條 清涼飲料製造者ハ毎月其ノ製造場外ニ移出シタル清涼飲料ニ付第二條ノ區分毎ニ其ノ石數又ハ炭酸瓦斯使用量ヲ記載シタル申告書ヲ翌月十日迄ニ政府ニ提出スヘシ但シ前條第二號又ハ第三號ノ場合ニ於テハ直ニ之ヲ提出スヘシ

申告書ヲ提出ナキトキ又ハ政府ニ於テ申告ヲ不相當ト認メタルトキハ政府ハ課税標準額ヲ決定ス

第七條 清涼飲料税ハ毎月分ヲ翌月末日迄ニ納付スヘシ但シ第五條第二號又ハ第三號ノ場合ニ於テハ直ニ之ヲ納付スヘシ

第八條 清涼飲料製造者カ外國ニ輸出スル目的ヲ以テ製造場外ニ移出スル清涼飲料ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ清涼飲料税ヲ免除ス

前項ノ清涼飲料ニシテ製造場外ニ移出セラレタル後六月以内ニ外國ニ輸出セラレタルコトノ證明ナキモノニ付テハ直ニ其ノ清涼飲料税ヲ徴收ス但シ天災其ノ他已ムコトヲ得サル事出ニ因リ亡失シタルモノニ付政府ノ承認ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第九條 前條第一項ノ清涼飲料ハ之ヲ内地ニ於テ消費シ又ハ内地ニ於テ消費スル目的ヲ以テ譲渡スルコトヲ得ス但シ已ムコトヲ得サル事由ニ因リ政府ノ承認ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ承認ヲ受ケタルトキハ直ニ其ノ清涼飲料稅ヲ納付スハシ

第十條 政府ハ清涼飲料稅ニ付必要アリト認ムルトキハ、令ノ定ムル所ニ依リ納稅ノ保證トシテ清涼飲料製造者ニ對シ擔保ヲ提供セシムルコトヲ得

第十一條 清涼飲料ノ製造者又ハ販賣者ハ清涼飲料ノ製造出入ニ關スル事實ヲ詳細明瞭ニ帳簿ニ記載スヘシ

清涼飲料ノ製造者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ清涼飲料ノ製造ニ關シ必要ナル事項ヲ政府ニ申告スヘシ

第十二條 收稅官吏ハ清涼飲料ノ製造者又ハ販賣者ノ所持ニ係ル清涼飲料、其ノ製造出入ニ關スル一切ノ帳簿書類及清涼飲料ノ製造又ハ販賣上必要ナル建築物、器具、器械、原料其ノ他ノ物件ヲ檢査シ又ハ監督上必要ナル處分ヲ爲スコトヲ得

第十三條 製造免許ヲ受ケスシテ清涼飲料ヲ製造シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處シ直ニ其ノ清涼飲料稅ヲ徵收ス

前項ノ清涼飲料並其ノ容器、器具及器械ハ之ヲ沒收ス

第十四條 清涼飲料ノ製造者第六條ノ規定ニ依ル申告ヲ怠リ又ハ詐リタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ヲ以テ清涼飲料稅ヲ遁脱シ又ハ遁脱ヲ圖リタル者ハ其ノ清涼飲料稅五倍ニ相當スル罰金ニ處シ直ニ其ノ清涼飲料稅ヲ徵收ス但シ罰金額カ二十圓ニ滿タサルトキハ之ヲ二十圓トス

第十六條 清涼飲料ノ製造者又ハ販賣者清涼飲料ノ製造出入ニ關スル帳簿書類若ハ原料ヲ隠匿シ又ハ帳簿ノ記載若ハ第十一條ノ規定ニ依ル申告ヲ怠リ若ハ詐リタルトキハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第十七條 收稅官吏ノ質問ニ對シ答辯ヲ爲サス若ハ虛偽ノ陳述ヲ爲シ又ハ其ノ職務ノ執行ヲ拒ミ、妨ケ若ハ忌避シタル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第十八條 清涼飲料ノ製造者又ハ販賣者ノ代理人、戶主、家族同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ義務ニ關シ本法ヲ犯シタルトキハ其ノ製造者又ハ販賣者ヲ處罰ス

第十九條 第十條ノ規定ニ依リ擔保ヲ提供セサル者、第十四條若ハ第十五條ノ規定ニ依リテ處罰若ハ處分セラレタル者又ハ三年以上引續キ清涼飲料ヲ製造セサル者ニ對シテハ政府ハ清涼飲料製造ノ免許ヲ取消スコトヲ得

第二十條 本法ヲ施行セサル地ニ於テ製造シタル清涼飲料ハ本法ト同一ノ稅率ヲ有スル法規ヲ其ノ地ニ於テ施行スル迄ハ之ヲ本法施行地ニ移入スルコトヲ得ス

前項ノ規定ニ違反シテ清涼飲料ヲ移入シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處シ直ニ其ノ石數ニ應ジ第二條第二種ノ稅率ニ依リ算出シタル清涼飲料稅ヲ徵收ス

前項ノ清涼飲料及其ノ容器何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス

第二十一條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書第三十九條第二項第四十條、第四十一條、第四十八條第二項第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヒス但シ第十七條ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十二條 第十一條、第十二條、第十六條乃至第十八條及第十二條ノ規定ハ販賣ノ目的ヲ以テ炭酸瓦斯ヲ製造スル者又ハ炭酸瓦斯ヲ販賣スル者ニ付之ヲ準用ス

第二十三條 自己又ハ其ノ家族ノ用ニ供スル清涼飲料ノミヲ製造スル者ニハ本法ヲ適用セス

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス  
本法施行前ヨリ引續キ清涼飲料ヲ製造スル者ハ本法施行後一月以内ニ其ノ旨政府ニ申告スルトキハ本法施行ノ日ヨリ本法ニ依リ製造免許ヲ受ケタルモノト看做ス

# 織物消費稅法中改正

法律二十二號 (大正十五年三月二十七日)

第一條ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ綿織物ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第一條ノ二 本法ニ於テ綿織物ト稱スルハ全重量百分中九十五

以上ノ綿ヲ以テ組成シ絹、人造絹、金屬絲、金屬線、金屬箔

漆絲又ハ漆箔ヲ交ヘサル織物ヲ謂フ

絹紡細絲、芭蕉絲其ノ他命令ヲ以テ定ムル原料ヲ以テ組成ス

ル織物ニシテ命令ノ定ムルモノハ之ヲ綿織物ト看做ス

第二十三條 第十二條、第十四條乃至第十六條、第十八條第二

號第四號及第十九條乃至第二十一條ノ規定ハ綿織物ニモ之ヲ

適用ス

政府ニ申告セスシテ綿織物ヲ製造シタル者ハ五十圓以下ノ罰

金又ハ科料ニ處ス

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

左ニ掲グル綿織物又ハ之ヲ以テ製造シタル物品ニ付テハ仍從

前ノ例ニ依ル

一 本法施行前消費稅ヲ課ヘカリシモノ

二 本法施行前外國輸出若ハ朝鮮移出ノ目的ヲ以テ又ハ織物

消費稅法第七條ノ規定ニ依リテ消費稅ヲ納付セスシテ製造

場又ハ保税地域ヨリ引取リタルモノ

三 本法施行前消費稅ノ徵收ヲ猶豫シタルモノ

四 本法施行前消費稅ヲ納付シテ外國ニ輸出シ又ハ朝鮮ニ移

出シタルモノ

消費稅ヲ納付シタル綿織物又ハ之ヲ以テ製造シタル物品ヲ本

法施行後外國ニ輸出シ又ハ朝鮮ニ移出スルモ織物消費稅法第

三條第二項ノ規定ヲ適用セス

法 令

〔參 照〕

明治四十三年(三月二十五日公布)法律第七號織物消費稅法抄

錄 第一條 織物ニハ本法ニ依リ消費稅ヲ課ス

## 地方稅ニ關スル件

法律第二十四號 (大正十五年三月二十七日)

第一條 北海道、府縣ハ本法ニ依リ特別地稅、家屋稅、營業稅

及雜種稅ヲ賦課スルコトヲ得

第二條 特別地稅ハ地和條例第十三條ノ二ノ規定ニ依リテ地租

ヲ徵收セサル田畑ニ對シ地租條例第一條ノ地價ヲ標準トシテ

之ヲ賦課ス

特別地稅ノ徵收ニ關シテハ地租條例第十三條ノ規定ヲ準用ス

第三條 特別地稅ノ賦課率ハ北海道ニ在リテハ地價百分ノ二・

六以內、府縣ニ在リテハ地價百分ノ三・七以內トス

特別地稅ニ對シ市町村共ノ他ノ公共團體ニ於テ賦課スヘキ附

加稅ノ賦課率ハ前項ニ規定スル制限ノ百分ノ八十以內トス

第四條 府縣費ノ全部ノ分賦ヲ受ケタル市ハ第二條ノ例ニ依リ

地價百分ノ二・九、外其ノ分賦金額以內ニ限リ前條第一項ニ

規定スル制限ニ達スル迄特別地稅ヲ賦課スルコトヲ得

北海道地方費又ハ府縣費ノ一部ノ分賦ヲ受ケタル市町村ハ前

條第二項ニ規定スル制限ノ外其ノ分賦金額以內ニ限リ特別地

稅附加稅ヲ賦課スルコトヲ得但シ北海道、府縣ノ賦課額ト市

町村ノ賦課額トノ合算額ハ前條第一項ニ規定スル制限ヲ超ユ

ルコトヲ得ス

第五條 特別地稅又ハ其ノ附加稅ト段別割トヲ併課スル場合ニ

於テハ段別割ノ總額ハ第三條又ハ前條ノ規定ニ依リテ其ノ地

目ノ土地ニ對シ賦課シ得ヘキ制限額ト特別地稅額又ハ其ノ附

第二十三卷 (第一號一六七) 一六七

加税額トノ差額ヲ超ユルコトヲ得ス

第六條 特別地稅又ハ其ノ附加稅ノ賦課ノ第二條乃至前條ニ規定スル制限ニ達シタル場合ニ非サレハ明治四十一年法律第三十七號第五條ノ規定ニ依ル地租、營業收益稅又ハ所得稅ノ附加稅ノ制限外課稅ヲ爲スコトヲ得ス

特別地稅又ハ其ノ附加稅ト段別割トフ併課シタル場合ニ於テ一地口ニ對スル賦課ノ前條ニ規定スル制限ニ達シタルトキハ前項ノ規定ノ適用ニ付テハ特別地稅又ハ其ノ附加稅ノ制限ニ達シタルモノト看做ス

第七條 特別ノ必要アル場合ニ於テハ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケ第三條乃至第五條ニ規定スル制限ヲ超過シ其ノ百分ノ十二以內ニ於テ特別地稅又ハ其ノ附加稅ヲ賦課スルコトヲ得

左ニ掲クル場合ニ於テハ特ニ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケ前項ニ規定スル制限ヲ超過シテ課稅スルコトヲ得  
一 內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケテ起シタル負債ノ元利償還ノ爲費用ヲ要スルトキ

二 非常ノ災害ニ因リ復舊工事ノ爲費用ヲ要スルトキ  
三 水利ノ爲費用ヲ要スルトキ  
四 傳染病豫防ノ爲費用ヲ要スルトキ

前二項ノ規定ニ依リ制限ヲ超過シテ課稅スルハ營業收益稅及所得稅ノ附加稅ノ賦課ノ明治四十一年法律第三十七號第二條及第三條ニ規定スル制限ニ達シタルトキニ限ル

第八條 特別地稅及其ノ附加稅ノ賦課率ハ當該年度ノ豫算ニ於テ定メタル田畑ニ對スル地租附加稅ノ賦課率ヲ以テ算定シタル地租附加稅額ノ當該田畑ノ地價ニ對スル比率ヲ超ユルコトヲ得ス  
第九條 家屋稅ハ家屋ノ賃貸價格ヲ標準トシテ家屋ノ所有者ニ之ヲ賦課ス

第十條 家屋ノ賃貸價格ハ家屋稅調査委員ノ調査ニ依リ北海道ニ在リテハ北海道廳長官、府縣ニ在リテハ府縣知事之ヲ決定ス

第十一條 左ニ掲クル家屋ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ家屋稅ヲ賦課セサルコトヲ得  
一 一時ノ使用ニ供スル家屋

二 賃貸價格一定額以下ノ家屋  
三 公益上其ノ他ノ事由ニ因リ課稅ヲ不適當トスル家屋

第十二條 府縣費ノ全部ノ分賦ヲ受ケタル市ハ第九條乃至前條ノ例ニ依リ家屋稅ヲ賦課スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ府縣知事ノ職務ハ市長之ヲ行フ

第十三條 家屋稅及其ノ附加稅ノ賦課率及賦課ノ制限並家屋ノ賃貸價格ノ算定及家屋稅調査委員ノ組織ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條 營業稅ハ營業收益稅ノ賦課ヲ受ケサル營業者及營業收益稅ヲ賦課セサル營業ヲ爲ス者ニ之ヲ賦課ス  
第十五條 營業稅ヲ賦課スヘキ營業ノ種類ハ營業收益稅法第二條ニ掲クルモノ及勅令ヲ以テ定ムルモノニ限ル

第十六條 府縣費ノ全部ノ分賦ヲ受ケタル市ハ第十四條及前條ノ例ニ依リ營業稅ヲ賦課スルコトヲ得

第十七條 第十一條第三號ノ規定ハ營業稅ニ之ヲ準用ス  
第十八條 營業稅ノ課稅標準並營業稅及其ノ附加稅ノ賦課ノ制限ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 雜種稅ヲ賦課スルコトヲ得ヘキモノノ種類ハ勅令ヲ以テ定ムルモノ並內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケタルモノニ限ル

第二十條 第十一條第三號ノ規定ハ雜種稅ニ之ヲ準用ス  
第二十一條 雜種稅ノ課稅標準並雜種稅及其ノ附加稅ノ賦課ノ制限ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

# 健康保險特別會計法

法律第二十六號 (大正十五年三月二十七日)

第二十二條 市町村ハ本法ニ依リ戸數割ヲ賦課スルコトヲ得  
第二十三條 戸數割ハ一戸ヲ構フル者ニ之ヲ賦課ス  
戸數割ハ一戸ヲ構ヘサルモ獨立ノ生計ヲ營ム者ニ之ヲ賦課ス  
ルコトヲ得  
第二十四條 戸數割ハ納稅義務者ノ資力ヲ標準トシテ之ヲ賦課  
ス  
第二十五條 戸數割ノ課稅標準タル資力ハ納稅義務者ノ所得額  
及資産ノ狀況ニ依リ之ヲ算定ス  
第二十六條 第十二條第三號ノ規定ハ戸數割ニ之ヲ準用ス  
第二十七條 戸數割ノ賦課ノ制限、納稅義務者ノ資産ノ狀況ニ  
依リ資力ヲ算定シテ賦課スヘキ額其ノ他納稅義務者ノ資力算  
定ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
第二十八條 北海道府縣以外ノ公共團體ニ對スル第七條ノ許可  
ノ職權ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ地方長官ニ委任スルコト  
ヲ得

## 附則

本法ハ大正十五年度分ヨリ之ヲ適用ス但シ家屋稅營業稅及雜種  
稅其ノ附加稅並戸數割ニ關スル規定ハ大正十六年度分ヨリ之ヲ  
適用ス  
明治十三年第十六號布告及同年第十七號布告ハ大正十五年度分  
限リ之ヲ廢止ス  
第六條及第七條中營業收益稅トアルハ大正十五年度分特別地稅  
及其ノ附加稅ニ付テハ國稅營業稅トス  
家屋稅ハ大正十八年度分迄ニ限リ第九條乃至第十二條ノ規定ニ  
拘ラス別ニ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ賦課スルコトヲ得

## (參照)

明治十三年(四月八日)太政官布告第十六號ハ地方稅規則、同  
年(同月同日)同第十七號ハ地方稅中營業稅雜種稅ノ種類ノ件  
ナリ

第一條 健康保險事業ヲ經營スル爲特別會計ヲ設置シ其ノ歲入  
ヲ以テ其ノ歲出ニ充ツ

第二條 本會計ニ於テハ保險料、一般會計ヨリ繰入ルル金額、  
積立金ヨリ生スル收入、借入金及附屬雜收入ヲ以テ其ノ歲入  
トシ保險給付費、保健施設費、借入金ノ償還金及其ノ利子、  
一時借入金ノ利子、事業取扱費、修繕費其ノ他ノ諸費ヲ以テ  
其ノ歲出トス

第三條 前條ノ一般會計ヨリ繰入ルル金額ハ勅令ノ定ムル所ニ  
依リ保險給付ニ要スル費用ノ十分ノ一トス但シ被保險者一人  
ニ付一年平均試圖ノ割合ヲ超ユルコトヲ得ス  
前項ノ規定スル被保險者ノ員數ノ計算ニ關シテハ勅令ヲ以テ  
之ヲ定ム

第四條 本會計ニ於テ決算上剩餘金ヲ生スルトキハ之ヲ積立ツ  
ヘシ

第五條 本會計ノ歲計ニ不足アルトキハ積立金ヨリ之ヲ補足スヘシ  
本會計ニ屬スル經費ヲ支辨スル爲必要アルトキハ政府  
ハ本會計ノ負擔ニ於テ借入ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ借入ヲ爲スコトヲ得ル金額ハ保險料ヲ以テ  
保險給付費及保健施設費ヲ支辨スル能ハサル場合ニ借入ルル  
モノヲ除クノ外最高五百萬圓トス

第六條 本會計ニ於テ支拂上現金ニ餘裕アルトキハ大藏省預金  
部ニ之ヲ預入ルルコトヲ得

第七條 本會計ニ於テ支拂上現金ニ不足アルトキハ本會計ノ負  
擔ニ於テ一時借入ヲ爲シ又ハ國庫餘裕金ヲ繰替使用スルコト  
ヲ得

前項ノ規定ニ依ル一時借入金又ハ繰替金ハ當該年度内ニ之ヲ

返還スヘシ

第八條 政府ハ毎年本會計ノ歲入歳出豫算ヲ調整シ歲入歳出ノ總豫算ト共ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第九條 本會計ノ收入支出及積立金ノ運用ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附 則

本法ハ大正十六年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

## 農業倉庫業法中改正

法律第三十二號 (大正十五年三月二十七日)

第一條 第一項ヲ左ノ如ク改ム

本法ニ於テ農業倉庫業者トハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ヲ謂フ

一 農業ヲ營ム者カ其ノ生産シタル穀物、繭其ノ他勸令ヲ以テ指定スル物品ヲ所有スル場合又ハ土地ニ付權利ヲ有スル者カ小作料トシテ受ケタル穀物其ノ他勸令ヲ以テ指定スル物品ヲ所有スル場合ニ於テ其ノ者ノ爲ニ本法ニ依リ之ヲ倉庫ニ保管スル者

二 販賣組合又ハ販賣組合聯合會カ賣却スル繭ヲ其ノ者ノ爲ニ本法ニ依リ倉庫ニ保管スル者

同條第四項中「前三項」ヲ「前二項」ニ改メ第三項ヲ削ル

第二條中第五號トシ第六號トシ第四號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ

五 受寄物ヲ聯合農業倉庫業者ニ寄託シタル場合ニ於テ其ノ物品ノ聯合倉庫證券ヲ擔保トシテ貸付ヲ爲スコト

第四條中「非サレハ」ノ下ニ「第一條第一項第一號ノ」ヲ加ヘ同條ニ左ノ一項ヲ加フ

命令ヲ以テ指定スル産業組合聯合會ニ非サレハ第一條第一項第二號ノ農業倉庫業者タルコトヲ得ス

第五條第一項中「産業組合カ農業倉庫業者タルトキ」ヲ「農業倉庫業者タル産業組合又ハ産業組合聯合會」ニ、同條第二項中「産業組合」ヲ「前項ノ産業組合又ハ産業組合聯合會」ニ「組合員」ヲ「組合員又ハ所屬組合若ハ所屬聯合會」ニ、及第五號ヲ「及至第六號」ニ、同條第三項中「農會又ハ公益法人カ農業倉庫業者タルトキ」ヲ「農業倉庫業者タル農會又ハ公益法人」ニ、及第五號ヲ「乃至第六號」ニ改ム

第七條ノ二 農業倉庫業者ハ寄託者ノ請求ニ因リ寄託物ノ倉荷證券ヲ交付スルコトヲ要ス

商法第三百八十三條ノ二第二項及第三百八十三條ノ二ノ規定ハ前項ノ倉荷證券ニ之ヲ準用ス

第八條第一項中「預證券及質入證券又ハ」ヲ削ル

第十條第二項中「又ハ第三項」ヲ削リ同條第三項中「第四項」ヲ「第三項」ニ、「乃至第三項」ヲ「及第二項」ニ改ム

第十一條中「及第九章第二節」ヲ「第三百七十五條乃至第三百七十八條及第三百八十一條乃至第三百八十三條ノ規定」ニ改ム

第十四條中「所得稅」ノ下ニ「營業收益稅」ヲ加フ

第十四條ノ二 農業倉庫業者ノ農業倉庫又ハ其ノ敷地ニ關スル權利ノ取得ニ關シテハ地方稅ヲ課スルコトヲ得ス

第十九條 本法ニ於テ聯合農業倉庫業者トハ農業倉庫業者カ第一條第一項及第二項ノ規定ニ依リ寄託ヲ受ケタル物品ヲ本法ニ依リ倉庫ニ保管スル者ヲ謂フ

聯合農業倉庫業者ハ他ノ聯合農業倉庫業者カ前項ノ規定ニ依リ寄託ヲ受ケタル物品ヲ保管スルコトヲ得

聯合農業倉庫業者ハ前二項ノ規定ニ依リ保管ニ支障ナキ場合ニ限り業務規程ノ定ムル所ニ依リ農業倉庫業者カ第一條第三項ノ規定ニ依リ定託ヲ受ケタル物品又ハ販賣組合若ハ販賣組合聯合會カ賣却スル物品ヲ保管スルコトヲ得他ノ聯合農業倉庫業者カ本項ノ規定ニ依リ寄託ヲ受ケタル物品ニ付亦同シ



第二十條 産業組合聯合會ニ非サレハ聯合農業倉庫業者タルコトヲ得ス

第二十一條 聯合農業倉庫業者タル産業組合聯合會ハ産業組合法ニ規定スルモノノ外第二條(第二十六條第一項ノ規ニ依リ準用)及第十九條ニ規定スル事業ヲ目的ト爲スコトヲ得  
前項ノ産業組合聯合會ハ所屬組合又ハ所屬聯合會ノ爲ニ前項ノ事業ヲ爲スノ外附隨トシテ所屬組合又ハ所屬聯合會ニ非サル組合又ハ聯合會ノ爲ニ之ヲ爲スコトヲ得但シ第二條第四號乃至第六號(第二十六條第一項ノ規定ニ依リ準用)ノ事業ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第二十二條 農業倉庫業者カ寄託者又ハ農業倉庫證券ノ所持人及受寄物ノ質權者アル場合ニ於テハ其ノ質權者ノ承諾ヲ得テ其ノ受寄物ヲ聯合農業倉庫業者ニ寄託シタル場合ニ於テハ其ノ寄託ニ因リ生シタル農業倉庫業者ノ權利義務ハ當初ノ寄託者又ハ農業倉庫證券ノ所持人ニ移轉シ當初ノ寄託ハ將來ニ向テ其ノ效力ヲ失フ

第二十三條 農業倉庫業者カ其ノ受寄物ヲ聯合農業倉庫業者ニ寄託セムトスル場合ニ於テ其ノ受寄物ノ農業倉庫證券アルトキハ將來ニ向テ其ノ證券ノ裏書ヲ禁止スルコトヲ得  
農業倉庫業者ハ前項ノ證券ノ裏書ヲ禁止スルニ非サレハ受寄物ヲ聯合農業倉庫業者ニ寄託スルコトヲ得ス

第二十四條 聯合農業倉庫業者ハ其ノ受寄物ノ農業倉庫證券ナキ旨ノ農業倉庫業者ノ證明書又ハ前條第二項ノ規定ニ依リ裏書ヲ禁止セラレタル證券ト引換ニ非サレハ其ノ受寄物ノ聯合農業倉庫證券ヲ交付スルコトヲ得ス

第二十五條 前三條ノ規定ハ聯合農業倉庫業者カ其ノ受寄物ヲ他ノ聯合農業倉庫業者ニ寄託スル場合ニ之ヲ準用ス

第二十六條 第二條、第三條、第六條乃至第九條、第十條第一項及第十一條乃至第十八條ノ規定ハ聯合農業倉庫業者ニ之ヲ

準用ス但シ第二條第六號中農業倉庫業者トアルハ農業倉庫業者又ハ聯合農業倉庫業者、農業倉庫證券トアルハ農業倉庫證券又ハ聯合農業倉庫證券トシ第八條中農業倉庫證券トアルハ聯合農業倉庫證券トス  
第十條第二項ノ規定ハ第十九條第一項又ハ第二項ニ規定スル寄託物ニ、同條第三項ノ規定ハ第十九條第三項ニ規定スル寄託物ニ之ヲ準用ス但シ聯合農業倉庫業者カ第十九條第一項及第二項ノ規定ニ依リ寄託ヲ受ケタル第一條第二項ノ物品ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

#### 附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
本法施行ノ際現ニ農業倉庫業者カ從前ノ第一條第三項ノ規定ニ依リ保管スル物品ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル  
本法施行ノ際現ニ存スル預證券及質入證券ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

### 輸出生絲検査法

法律第三十五號 (大正十五年三月二十七日)

第一條 生絲ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ正量ニ付國ノ生絲検査所ノ検査ヲ受ケタルモノニ非サレハ之ヲ輸出スルコトヲ得ス

主務大臣必要アリト認ムルトキハ公共團體ノ設クル生絲検査所ヲシテ前項ノ検査ヲ爲サシムルコトヲ得

第二條 生絲ハ前條ノ検査ニ依リ正量ニ依ルニ非サレハ輸出ノ目的ヲ以テ其ノ賣買取引ヲ爲スコトヲ得ス

輸出ノ業トスル者ノ主務大臣ノ指定スル地ニ於テ買入ノ爲ニ爲ス生絲ノ賣買取引ハ之ヲ輸出ノ目的ヲ以テ爲スモノト看做ス

第三條 主務大臣特別ノ事情ニ依リ前二條ノ規定ヲ適用スル必  
要ナシト認ムル場合ハ命令ヲ以テ其ノ適用ヲ除外スルコトヲ  
得

第四條 當該官吏取締上必要アリト認ムルトキハ店舗、倉庫其  
ノ他ノ場所ニ臨檢シ業務ノ狀況及帳簿、生絲其ノ他ノ物件ヲ  
檢査スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ證票ヲ携帯スヘシ

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
生絲檢査所法ハ之ヲ廢止ス

本法施行前ノ實買契約ニ因ル生絲ノ受渡及其ノ生絲ノ輸出ニ付  
テハ命令ノ定ムル所ニ依リ本法ヲ適用セサルコトヲ得輸出ヲ業  
トスル者カ本法施行前輸出ノ目的ヲ以テ買入ヲ了シ又ハ輸出ノ  
委託ヲ受ケタル生絲ノ輸出ニ付亦同シ

郵便年金法

法律第三十九號 (大正十五年三月二十九日)

第一條 郵便年金事業ハ政府之ヲ管掌ス

第二條 郵便年金契約ハ政府カ契約者又ハ第三者ノ生存ニ關シ  
テ其ノ者ニ年金ヲ支拂フヘキコトヲ約シ契約者カ對價トシテ  
政府ニ掛金ヲ拂込ムヘキコトヲ約スルモノトス

年金契約ノ種類、年金受取人ノ年齢、掛金及年金受取人ノ爲  
ニ積立ツヘキ金額ノ計算ノ基礎ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之  
ヲ定ム

第三條 年金ノ額ハ年金受取人一人ニ付年額二千四百圓以下ト  
ス

第四條 年金契約ノ申込ヲ承諾シタルトキハ郵便年金證書ヲ年  
金契約者ニ交付ス

郵便年金證書ニ記載スヘキ事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 年金契約ノ效力ハ掛金ヲ拂込ミタル日ニ始マル  
第六條 年金受取人カ第三者ナルトキハ其ノ第三者ハ當然年金  
契約ノ利益ヲ享受ス

第七條 年金契約者ハ年金契約申込ノ際年金受取人ノ死亡又ハ  
年金契約ノ解除若ハ變更ノ場合ニ於テ拂込掛金ノ返還ヲ請求  
スル權利ヲ自己又ハ年金受取人タル第三者ノ爲ニ留保スルコ  
トヲ得

返還ヲ請求シ得ヘキ拂込掛金ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ  
定ム

第八條 自己ヲ以テ拂込掛金ノ受取人ト爲シタルトキハ年金契  
約者ハ年金受取人タル第三者ヲ以テ拂込掛金ノ受取人ト爲ス  
コトヲ得

年金受取人タル第三者ヲ以テ拂込掛金ノ受取人ト爲シタルト  
キハ年金契約者ハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

第九條 年金又ハ第七條ニ規定スル拂込掛金ヲ受取ルヘキ權利  
ハ之ヲ讓渡スコトヲ得ス

第十條 年金ヲ受取ルヘキ權利ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス但シ  
年額或百五十圓ヲ超ユル金額ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十一條 年金契約者ハ第三者ヲシテ年金契約者トシテノ權利  
義務ヲ承繼セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テ年金契約者カ年  
金受取人ニ非サルトキハ年金受取人ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

前項ノ承繼ハ政府ニ通知スルニ非サレハ之ヲ以テ政府ニ對抗  
スルコトヲ得ス

第十二條 年金契約者ハ年金支拂ノ事由發生スル迄ハ年金契約  
ノ解除ヲ爲スコトヲ得

前項ノ解除ハ將來ニ向テノ其ノ效力ヲ生ス  
第十三條 年金契約者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ年金契約ノ變更  
ヲ請求スルコトヲ得

第十四條 年金契約者掛金ヲ拂込マシテ命令ノ定ムル猶豫期

間ヲ經過シタルトキハ政府ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ年金契約ヲ既ニ拂込ミタル掛金ニ依リ掛金拂濟年金契約ニ變更スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ掛金拂濟年金契約ニ變更セラレサル年金契約ハ解除セラレタルモノト看做ス

第十二條 第二項ノ規程ハ前項ノ解除ニ之ヲ準用ス

第十五條 第七條ノ規定ニ依リテ拂込掛金ノ返還ヲ請求スル權利ヲ留保シタル場合ニ於テハ年金契約者又ハ年金受取人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ拂込掛金ノ範圍内ニ於テ貸付ヲ請求スルコトヲ得

第十六條 年金又ハ第七條ノ規定スル拂込掛金ヲ支拂フヘキ場合ニ於テ其ノ年金契約又ハ之ニ基キテ爲シタル貸付ニ付政府カ辨濟ヲ受クヘキ金額アルトキハ支拂金額ヨリ之ヲ控除ス

第十七條 當該官署カ命令ノ定ムル所ニ依リ年金又ハ年金契約者若ハ年金受取人ニ返還スヘキ金額ヲ支拂ヒタルトキハ其ノ支拂ハ之ヲ有数トス

第十八條 年金支拂ノ義務及拂込掛金返還ノ義務ハ二年、掛金拂込ノ義務ハ一年ヲ經過シタルトキハ時效ニ因リテ消滅ス

第十九條 年金契約者又ハ年金受取人カ郵便年金ニ關スル事項ニ付政府ニ對シテ民事訴訟ヲ提起スルニハ簡易生命保險審査會ノ審査ヲ經ルコトヲ要ス

第二十條 前條ノ審査ノ請求ハ時效ノ中斷ニ關シテハ之ヲ裁判上ノ請求ト看做ス

第二十一條 郵便年金ニ關スル書類ニハ印紙稅ヲ課セス

第二十二條 郵便年金ノ事務ニ關スル郵便物ハ命令ノ定ムル所ニ依リ無料ト爲スコトヲ得

#### 附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

## 製鐵事業獎勵法

法律第四十九號 (大正十五年三月三十日)

第一條 一ノ場所ニ於テ一年三萬五千噸以上ノ製鐵能力及一年三萬五千噸以上ノ製鋼能力ヲ有スル設備ヲ以テ營ム製鐵事業ハ土地收用法第二條ノ土地ヲ收用又ハ使用スルコトヲ得ル事業トシ同法ヲ適用ス

第二條 主務官廳ノ認可ヲ受ケ一定ノ期間内ニ前條ノ規定スル設備ヲ新設シタル製鐵事業者ニハ設備完成ノ年及其ノ翌年ヨリ十五年間其ノ設備ヲ以テ營ム製鐵事業ニ付營業稅、營業收益稅及所得稅ヲ免除ス

前項ノ製鐵事業者其ノ設備完成前其ノ設備ノ一部ヲ以テ製鐵事業ヲ營ム場合ニ於テモ其ノ事業ニ付營業稅、營業收益稅及所得稅ヲ免除ス但シ前項ノ規定ニ依リ期間内ニ設備ヲ完成セサルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三條 第一條ノ規定ニ該當セサル設備ヲ以テ製鐵事業ヲ營ム者主務官廳ノ認可ヲ受ケ一定ノ期間内ニ第一條ノ規定ニ該當スルニ至ルヘキ設備ヲ増設シタルトキハ其ノ増設シタル設備ヲ以テ營ム製鐵事業ニ付前條ノ規定ヲ準用ス

第一條ノ規定スル設備ヲ以テ製鐵事業ヲ營ム者作業上必要ナル場合ニ於テ主務官廳ノ認可ヲ受ケ一定ノ期間内ニ其ノ場所ニ於テ製鐵又ハ製鋼ノ設備ヲ増設シタルトキ亦前項ニ同シ

第四條 主務官廳ノ認可ヲ受ケ一定ノ期間内ニ一ノ場所ニ於テ一年五千二百五十噸以上ノ製鋼能力ヲ有スル設備ヲ新設シタル製鐵事業又ハ製鋼品製造事業者ニ付テハ第二條ノ規定ヲ準用ス

主務官廳ノ認可ヲ受ケ一定ノ期間内ニ一ノ場所ニ於テ一年二千五百噸以上ノ製鐵能力又ハ製鋼能力ヲ有スル設備ヲ新設シ

タル低機銃製造事業者、坩堝製鋼事業者及電氣製造事業者  
ニ付亦前項ニ同シ

第五條 第一條乃至前條ニ規定スル製鐵事業ノ範圍ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 製鐵ノ事業ヲ繼續スル者又ハ其ノ事業ヲ繼續スルモノト認ムヘキ事實アル者ハ前事業者カ本法ニ依ル營業稅、營業收益稅及所得稅免除期間内ニ在ルトキハ其ノ期間ヲ繼承ス

第七條 北海道、府縣及市町村其ノ他之ニ準スヘキモノハ本法ニ依リ營業稅、營業收益稅及所得稅ヲ免除セラレタル製鐵事業者ニ對シ其ノ免除セラレタル部分ニ相當スル資本金額、從業者、營業用ノ工作物若ハ物件、使用動力又ハ收入ヲ標準トシテ課稅スルコトヲ得ス但シ市町村其ノ他之ニ準スヘキモノニシテ特別ノ事情ニ基キ主務官廳ノ認可ヲ受ケタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第八條 製鐵事業者左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ政府ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ製鐵事業者ニ對シ獎勵金ヲ交付スルコトヲ得

一 第一條ニ規定スル設備ヲ以テ製鐵事業ヲ營ムトキ

二 主務官廳ノ認可ヲ受ケ一定ノ期間内ニ第一條ニ規定スル設備ヲ完成スルニ至ルヘキトキ

三 二以上ノ製鐵事業者ノ事業ニシテ主務官廳ニ於テ其ノ作業ノ狀況ニ依リ第一條ニ規定スル製鐵事業ニ準スヘキモノト認メタルトキ

第九條 帝國内ニ於テ製造シタル鋼材力船舶ノ建造又ハ修繕ニ使用セラレタル場合ニ於テハ政府ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ鋼材ノ製造者ニ對シ獎勵金ヲ交付スルコトヲ得

第十條 詐欺ノ行爲ヲ以テ前二條ノ獎勵金ノ交付ヲ受ケタル者ニ對シテハ其ノ金額ヲ償還セシム

第八條ノ獎勵金ノ交付ヲ受ケタル者本法、本法ニ基キテ發スル命令又ハ交付ノ條件ニ違反シタルトキハ其ノ金額ヲ償還セシムルコトヲ得

前二項ノ規定ニ依ル償還金ハ國稅滯納處分ノ例ニ依リ之ヲ徵收スルコトヲ得但シ先取特權ノ順位ハ國稅ニ次クモノトス

第十一條 第一條ニ規定スル製鐵事業者ノ爲必要ナル器具、機械其ノ他ノ材料ヲ主務官廳ノ認可ヲ受ケ輸入スルトキハ本法施行ノ日ヨリ十五年間命令ノ定ムル所ニ依リ輸入稅ヲ免除ス

第十二條 本法ニ依リ認可ヲ受ケタル事項ヲ變更セムトスルトキハ主務官廳ノ認可ヲ受ケハシ

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

本法施行ノ際現ニ土地收用法ノ適用ヲ受ケ又ハ輸入稅ノ免除ヲ受クルコトヲ得ヘキ製鐵事業者ニシテ第一條ノ規定ニ該當セサルモノニ付テハ本法施行後五年間内從前ノ例ニ依ル

本法施行ノ際現ニ營業稅及所得稅ノ免除ヲ受クルコトヲ得ヘキ製鐵事業者ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル但シ從前ノ規定ニ於テ開業ノ年又ハ能力増加ノ年及其ノ翌年ヨリ十年間トアルハ之ヲ開業ノ年又ハ能力増加ノ年及其ノ翌年ヨリ十五年間トシ營業稅トアルハ營業稅及營業收益稅トス